10　可憐に変身　日本

中納言朝忠
鈴木春信筆

Scene Based on a Love Poem by the Nobleman Fujiwara no Asatada
By Suzuki Harunobu

小倉百人一首の中納言藤原朝忠による恋の歌を発想源にして、恋文を読む娘は、経巻を持つ寒山に、箒を手にする女性を拾得に、それぞれ見立てています。鈴木春信は、古典などの設定を当世風俗に移し変えて絵解きを楽しむ作品を得意とした絵師で、柔らかな色調の可憐な美人画を多く描きました。

11　歌舞伎で変身　日本

初代中村喜代三郎のお七と初代尾上菊五郎の小姓吉三郎（見立寒山拾得）
石川豊信筆

The Actors Nakamura Kiyosaburō as Oshichi and Onoe Kikugorō as Kichisaburō (Allusion to Hanshan and Shide)
By Ishikawa Toyonobu

恋人に会いたい一心で江戸に火を放ったお七の話は、歌舞伎の演目でもたいへん人気でした。寒山拾得に見立て、経巻のかわりとして、お七が寺に奉納した額を暗示させる「松竹梅」の紙が描かれています。豊信の特徴である丸みのある顔立ちや、錦絵（多色摺版画）が生まれる前の、紅と草色のみの対比が上品な作品です。

18　大画面の迫力　日本

豊干禅師
河鍋暁斎筆

The Zen Monk Fenggan
By Kawanabe Kyōsai

豊干は中国唐代の禅僧で天台山国清寺に住み、虎を飼いならし、寒山と拾得の師として知られました。豊干と寒山、拾得が虎とともに眠る姿は、禅の境地を示すとされ、「四睡図」としてしばしば描かれました。本作は横3.5メートルを超える大幅です。暁斎は幕末から明治時代前期の日本画家で、戯画や諷刺画に本領を発揮しています。

展示作品リスト　◉：国宝　◎：重要文化財　　展示期間：前期　9月12日（火）〜10月9日（月・祝）、後期　10月11日（水）〜11月5日（日）

	指定	名称	作者等	時代・世紀	所蔵番号	期間
1	◉	寒山拾得図（禅機図断簡）	因陀羅筆、楚石梵琦賛	中国　元時代・14世紀	TA-343	前
2		寒山拾得図	伝因陀羅筆、慈覚賛	中国　元時代・14世紀	TA-139	後
3	◎	寒山拾得図	伝顔輝筆	中国　元時代・14世紀	TA-148	後
4	◎	四睡図	平石如砥、華国子文、夢堂曇噩賛	中国　元時代・14世紀	TA-315	前
5		寒山拾得図（寒山拾得蝦蟇鉄拐図のうち）	伝劉俊筆	中国　明時代・16世紀	TA-89-1, 2	前
6		寒山拾得図	伝孫克弘筆	中国　明〜清時代・17世紀	TA-182（高島菊次郎氏寄贈）	後
7		寒山拾得図	可翁仁賀筆	南北朝時代・14世紀		後
8	◎	寒山拾得図	伝周文筆、春屋宗園賛	室町時代・15世紀	A-10496	後
9		寒山拾得図	土岐洞文筆	室町時代・16世紀	A-10383	前
10		中納言朝忠	鈴木春信筆	江戸時代・18世紀	A-10569-1351	前
11		初代中村喜代三郎のお七と初代尾上菊五郎の小姓吉三郎（見立寒山拾得）	石川豊信筆	江戸時代・18世紀	A-10569-62	後
12		見立寒山	柳川重信筆	江戸時代・19世紀	A-10569-6205	前
13		見立拾得	柳川重信筆	江戸時代・19世紀	A-10569-6206	前
14		大坂新町ねりもの・中扇屋万寿太夫　寒山	柳川重信筆	江戸時代・文政5年（1822）	A-10569-5737	後
15		大坂新町ねりもの・中扇屋雛鶴太夫　拾得	柳川重信筆	江戸時代・文政5年（1822）	A-10569-5738	後
16		百人一首帖	烏丸光広筆	江戸時代・17世紀	B-3494（百瀬治氏・百瀬富美子氏寄贈）	
17		五言詩「城中乞食了」「手把兎角杖」	良寛筆	江戸時代・19世紀	B-3491（髙木聖鶴氏寄贈）	
18		豊干禅師	河鍋暁斎筆	明治時代・19世紀	A-883	

表紙作品：No.8

特集　東京国立博物館の寒山拾得図――伝説の風狂僧への憧れ――
令和5年（2023）9月12日発行
執筆：松嶋雅人、植松瑞希、高橋真作、大橋美織　撮影：藤瀬雄輔、吉岡由哲ほか
翻訳：ミウォシュ・ヴォズニ（以上、東京国立博物館）
デザイン・製作：erA　印刷：光村印刷株式会社　編集：東京国立博物館　発行：読売新聞社

©2023 Tokyo National Museum

主催　東京国立博物、読売新聞社、文化庁

本展の収益の一部は、「紡ぐプロジェクト」における文化財の修理事業に充てられます。

特別協賛　Canon　大和証券グループ　三井不動産　三菱地所　meiji

協賛　JR東日本　清水建設　TAKENAKA　SMBC　三菱商事

特集

東京国立博物館の寒山拾得図

――伝説の風狂僧への憧れ――

令和5年9月12日㈫〜11月5日㈰　　東京国立博物館　本館特別1室

Thematic Exhibition Admiring the Legendary Mad Monks: Paintings of Hanshan and Shide from the Museum Collection

寒山と拾得は中国、唐の時代の伝説的な詩僧で、その奇行ぶりは「風狂」ととらえられました。「風狂」は禅宗においてとくに重要視されて、絵画の画題としてしばしば描かれています。中国の知識階級である文人たちは、寒山拾得のふるまいに強く憧れ、世間の規範から逸脱することを、肯定的にとらえていたともいえます。日本においても鎌倉時代以降、寒山拾得図が数多く描かれたことから、この画題が人びとの心を強くひきつけたことがわかります。

この特集は「寒山拾得図」という伝統的な画題に着目し、中国と日本において寒山拾得が伝えた意味を考え、人びとがどのようにその世界観をとらえてきたかを問うものです。東京国立博物館が誇る、中国や日本で描かれたいろいろな寒山拾得図をまとめて展示し、各時代におけるさまざまな表現を通して、人びとが寒山拾得を見つめた様相を紹介します。

本特集は、表慶館で開催されている「横尾忠則 寒山百得」展（9月12日〈火〉〜12月3日〈日〉）の関連展示となります。

Hanshan and Shide were poet-monks who allegedly lived during China's Tang dynasty (618–907). They were called madmen for their eccentric behavior, but many saw their antics as a sign of enlightenment. They were particularly admired by followers of Zen Buddhism, and were depicted countless times in paintings.

People in China and Japan were captivated by Hanshan and Shide's deviation from societal norms, viewing their nonconformist behavior in a positive light. This exhibition focuses on Hanshan and Shide as a traditional subject in painting, exploring their significance in China and Japan and examining how people envisioned these two eccentrics and their unconventional worldview.

寒山拾得とは

寒山と拾得は、霊地である中国の天台山に住みついていたといわれる伝説上の人物で、禅宗においては、二人の脱俗の姿やふるまいが悟りの境地として、もてはやされました。二人は詩作をよくし、『寒山子詩集』にその作という詩が収められています。日本でも、鎌倉時代から近代にいたるまで、経巻を開く寒山と箒を持つ拾得など、さまざまな姿かたちで、多くの絵画に表わされています。また、天台山国清寺に住み、二人の師とされた豊干禅師と、彼が連れていた虎とともに眠る寒山拾得を描いた「四睡図」も、古くから親しまれてきました。

1　中国、個性派の筆さばき　中国

◉寒山拾得図（禅機図断簡）
因陀羅筆、楚石梵琦賛

The Eccentrics Hanshan and Shide
(From a Scroll of Zen Paitings)
By Yintuoluo; inscription by Chushi Fanqi

禅の僧侶画家である因陀羅の線描は、非常に個性的です。無造作に引かれたような墨線ですが、じっと眺めていると、自信に満ちた筆さばき、そして独特のリズムを感じとることができるでしょう。これは、いたずらに技巧や華やかさを求めない禅の精神にも通じるものがあります。

2　日本で愛された因陀羅風　中国

寒山拾得図
伝因陀羅筆、慈覚賛

The Eccentrics Hanshan and Shide
Attributed to Yintuoluo; inscription by Cijue

因陀羅の画風は、かわいた墨をこすりつけてやわらかくぼかした頭髪表現と、独特の線描を特徴とします。この画風は、元時代に流行し、日本にも多く伝えられて人気となります。仙台藩伊達家旧蔵の本作もその一つです。

4　美少年のねむり　中国

◎四睡図
平石如砥、華国子文、夢堂曇噩賛

The Four Sleepers
Inscriptions by Pingshi Rudi, Huaguo Ziwen and Mengtang Tan'e

非常に細く、緊張感のある墨線で、寒山拾得・豊干の目鼻や頭髪、衣、そして虎の毛を、丁寧に描き出します。文人に愛された白描という繊細な表現です。岩や地面に引き重ねられた波線、松の幹を埋める小さな渦、きのこのような霞の形によって、古めかしくみやびな雰囲気がかもし出されています。

3　えたいのしれなさナンバーワン　中国

◎寒山拾得図
伝顔輝筆

The Eccentrics Hanshan and Shide
Attributed to Yan Hui

ぼさぼさの髪、三日月形の目と口、白い歯をむき出しにして不気味に笑う寒山と拾得。顔には墨と色が丁寧に重ねられ、生々しく肉感的な表現がとられる一方、衣のあらあらしい筆づかいにより、二人の精神性を抽象的に伝えます。織田信長から石山本願寺の顕如上人に贈られたという、いわくつきの逸品です。

8　墨の技巧に注目　日本

◎寒山拾得図
伝周文筆、春屋宗園賛

The Eccentrics Hanshan and Shide
Attributed to Shūbun; inscription by Shun'oku Sōen

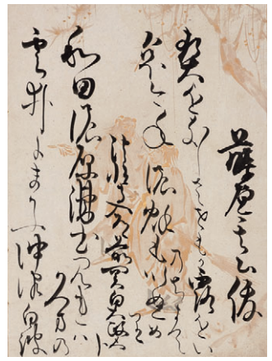
毛髪や箒を表わすあらあらしい筆法は、怪しい笑みを浮かべる寒山と拾得のエキセントリックな風貌に、よく合致しています。着衣の絶妙な墨のグラデーションも見逃せません。筆のかすれと墨のにじみを効果的に用いた作といえるでしょう。京都・大徳寺の春屋宗園が後から賛を書いています。

9　対照的な二人　日本

寒山拾得図
土岐洞文筆

The Eccentrics Hanshan and Shide
By Toki Dōbun

土岐洞文は、戦国時代に活躍した美濃（岐阜県）出身の武人画家。本作では、経巻の紐をとく寒山と、箒を持つ拾得が表わされていますが、その表現は対照的です。着衣を黒と白とで描き分けるだけでなく、おとなしそうな寒山に対して、拾得はどこかやんちゃな表情をしています。



16　書のひきたて役として　日本

百人一首帖
烏丸光広筆

Album of *One Hundred Poems by One Hundred Poets*
By Karasumaru Mitsuhiro

近世初期の公家で、和歌や書に秀でた烏丸光広が小倉百人一首を揮毫しています。浅葱や薄茶などの色の料紙に、梅や鹿といった動植物などが金銀泥で彩られています。藤原基俊と法性寺入道前関白太政大臣の和歌のページに、樹木の下に立つ寒山拾得の二人が描かれています。